

# 大阪の川文化

大阪・天神祭美化委員長 伴 一郎

はじめに

江戸の八百八町、なにわの八百八橋と例えられる大阪。現在でも市域面積の1割が川で占められています。市内中心部を流れる大川（旧淀川）と船を利用した祭礼のひとつに大阪天満宮の天神祭があります。今年で1,061年目を迎え7月25日の船渡御（ふな



写真一 現在の天神祭

とぎよ)には102万人（警察発表）の見物人が押し寄せました。100隻以上の船団に1万人以上が乗船。この夕方の祭りに、現在でも毎年10億円が使われています。川を使った水上祭では世界的に見ても巨大な祭りです。この祭は元禄のころから盛んになり町人や商人によって今に至るまで支え続けられてきています。当時の権力者であった武家に対し、多くの蔵屋敷の前を歌舞音曲と、何十体もの大きな歌舞伎役者や文楽を型取ったお迎え人形などを飾り付け、賑やかに船渡御をすることで、大坂商人の心意気や、力を天下に知らしめようと、下流の御旅所まで船渡御をしていました。このように大坂町人にとって川は生活や娯楽に無くてはならないものでした。



写真一 2 大正末期の天神祭

## 日本国中の賄所

大阪が「天下の台所」「日本国中の賄所」と言われた元禄時代に市中で活躍していた船の数は3,623隻（許可された船）。江戸期を通じ、中之島や縦横に張り巡らされた堀川添いに120もの諸藩の大名が川に面した場所に蔵と武家屋敷を併設した「蔵屋敷」を設けました（例えば、佐賀藩の場合敷地面積4,200坪）。これにより菱垣廻船などで全国から運ばれた物産や



写真一 3 大坂菱垣廻船

情報の集散地となりました。大名が江戸に向かう参勤交代の途中、逗留できる御殿などもあり、川から直接舟で屋敷に入れる「舟入」もありました。ここで忘れてはならないのが、各藩が物産以外に国元にある神社と祭礼をも一緒に蔵屋敷に持ち込んで来たこと。これにより全国の祭りが中之島を中心に毎日のように各藩の蔵屋敷で斎行されました。浜に

提灯をかかげ表御門や浜御門を町人や商人に開放し、屋敷に招き入れていました。藩によっては花火まで打ち上げ、群衆が押し寄せて大江橋が損傷したこともありました。蔵役人が国元から離れているからなのか、大坂という風土がそうさせるのか、岸木(雁木)に棧敷を設けたり、川床を作ったり、それぞれが年々競うようになり、何度もやりすぎだと奉行所からクレームがきました。中止命令がでてはいましたが、つねに川面は提灯で明るく年中どこかの藩で祭りを行っていました。夏には多くの涼舟で賑わい、大坂庶民にとっては居ながらにして全国の神社の参詣をし、ついでに物産や出し物が見物できる蔵屋敷祭礼は大人気でした。現在で言うと「全国120藩のテーマパーク」といったものかもしれません。

### 途切れかけた川の文化

川や水路を使った物流システムや交通は、昭和に入り市電や鉄道といった陸上交通が整備されていったことから舟運が激減してゆく。重工業の発達で地下水の汲み上げによる地盤沈下が続き、そのため多くの橋が沈下し、満潮時には航行できなくなりました。また、台風による高潮で市内に浸水することが多くなり、堤防のかさ上げが頻繁に行われ、水辺に人が近づけなくなりました。多くの堀川も埋立てられ、駐車場などになりました。昭和30年代後半から40年代は水質の汚濁により、観光船はゼロの状況。ただ、天神祭だけは続けられていました。

### 新しい川文化の始まり

平成15年の第3回世界水フォーラム(滋賀、京都、大



写真一 江戸期八軒家浜復活

阪流域で開催)が水都大阪を取り戻すきっかけとなり、国、府、市、経済界、船運業者が手を組み、道頓堀のリバーウォークを始め、江戸期の淀川下りで有名な三十石船(京都伏見～大坂八軒家)で賑わった八軒家浜船着場が復活しました。NPO大阪水上安全協会を設立。観光船業者による大阪シティークルーズ推進協議会などが、行政と一体となり、船着場の一元管理を行うなど、現在市内中心部の道頓堀川を含めた「口」の字型の川の回廊まで入れて、15ヶ所の川の駅ができています。川の水質改善が大き



写真一 西道頓堀川設置川の駅

く前進したことで、臭気も無くなり、水辺に人が集まりやすい環境になりました。昼休みには水辺でランチを食べる姿も多く見られ、水都のイベントでは巨大アヒルを浮かべたりして、川に目を向けてもらう試みも行っています。観光船客と水辺の人達がお互い手を振り合い、非常にフレンドリーな「見る」「見られる」関係ができあがり、こういうことが日常になり、長い間中止されていた大阪天満宮以外の神社が船渡御を復活してきています。また多くの子供達が中之島や水辺に近寄ってくることで、昔とカタチは変わっても、新しい水都大阪にふれることで自分たちの町に誇りを持つようになってきました。

20数年間この川で船遊びをしてきた私にとって、近年大阪の川に関するイメージは、橋のライトアップとも重なり、全く違ったものになり、まさにアンデルセン童話の「見にくいアヒル」の子がやがて、白鳥になって皆を驚かせた物語を思い出させるまでに至っています。